

近世の名所図会を題材とした 「湾」の景観分析・

Landscape Analysis of Bay Area by using
of MEISHO-ZUE pictures in Edo-era

○原田 弘之**, 盛岡 通***

By Hiroyuki HARADA and Tohru MORIOKA

The purpose of this study is to find the characteristics of attractive landscape of bay area, by analyzing MEISHO-ZUE pictures in Edo-era.

Through the analysis of 127 pictures, the following is found.

(1)The people in Edo-era preferred bay area of not only uncommon or unique landform, but also common landuse such as port and sandy beach.

(2)The preferred themes of landscape are classified into 7 patterns, and as a whole, the people preferred the landscape of which theme is total area of bay.

(3)The view points and the view directions to view the landscape of bay area are classified into 5 patterns, and as a whole, the people preferred the view direction to the other side of bay area.

1. 研究の背景と目的

湾とはいうまでもなく海岸部における凹型の地形であり、古来より人々が住みついた生活の場という側面と、そこに訪れ風景を愛でた景勝地という側面をもっている。いずれにせよ樋口忠彦がいう「蔵風得水型」の景観構造をしており¹⁾、人間が本能的に心安まる安息の地と感じられる重要な場所である。

一方、現状の湾岸域では、全国的な自然海岸の確実な減少、大都市圏域での海岸へのパブリックアクセスの悪化、自然性や歴史性などが豊かな地方の湾における景観破壊などが環境上の問題となっており、常住者および訪問者がそこで心の安定を得ることができる湾の景観形成が課題の一つである。

現在、全国さまざまな自治体で景観計画が策定されつつあるが、湾のみを対象とした景観計画はまだないようである。また、港の景観についてはかなりの研究ストックがあるが²⁾、湾に焦点を当てたものはまだ見られない。

そこで、本研究の目的は、あるべき湾らしい景観を追求するための手がかりとして、近世に描かれた名所図会を題材とし、当時好まれていた景観を分析、抽出、類型化することで、湾の景観計画を考える際の基礎的な知見を得ようとするものである。

また本研究では、湾を以下のように定義する。

○本研究における湾の定義：
海が陸地に入り込んだ水面部分とその周辺でひとつの「まとまり」を形成するもの

2. 分析対象としての名所図会

次の4つの理由から分析対象として、特に江戸時代の後期に庶民の間で流行した名所図会に注目する。

* キーワード：湾、景観、名所図会

** 正会員 工修 佛地域計画建築研究所
(〒540 大阪市中央区城見1-4-70
住友生命OBP7*ラビビル15F)

***正会員 工博 大阪大学教授 工学部環境工学科
(〒565 吹田市山田丘2-1)

- ①地形等への人手の加わり度合いが少なく、今よりも湾の原型的な景観を眺めていたと考えられること
- ②名所図会が描かれた江戸時代の主要な交通手段は「船運」で、おのずと湾岸域を見る機会が多く、湾岸域の景観に対して注意深かったと考えられること
- ③名所とは「景色または古跡で名高いところ³⁾」であり、その当時の湾の中でも、特に「見るべき」景観があった湾が選ばれていること
- ④名所図会とは庶民の人気を集めた観光ガイドであり、名所の中でもより人々が注目した有名な名所が収録され、また、その絵には対象地にとって空間的、時間的にもっとも理想的な景観が描かれ、それらを一般庶民が見ることによって、対象地へのイメージ形成に大きな役割を及ぼした集団表象であること

3. 分析方法

分析方法を図1に示す。
まず名所図会⁴⁾を総覧し、「ほぼ湾の全域」が描かれてある図会を127景抽出した(表1)。湾の最大の特徴は湾の凹性であり、まずは積極的に湾の特徴が活かされている景観に注目したいと考えたからである。

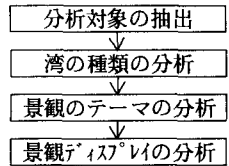


図1 分析方法の手順

次に分析のために景観計画上の視点を3つ設定した。まずその当時の湾の中で、どのような湾が注目されているかという「湾の種類」、ついでその湾を舞台としてどのような事物がテーマとして切りとられているかという「景観のテーマ」、そしてそのようなテーマをどのように見せているかという「景観ディスプレイ」である。

4. 名所図会に描かれた湾の種類分析

ここではどのような湾が当時注目されていたかを明らかにする。おもに地形の奇勝性(地形の珍しさ)と、湾における水辺部分の土地利用形態に注目して分類し、各種類の事例数をまとめたものを図2に示し、図2より明らかなことを以下に列挙する。

表1 分析対象の名所図会

名所図会の名称	刊行年	巻数	景数
松島図誌	1821	一	1
東国名勝志	1793	一～五	2
利根川図志	1858	巻一～六	2
成田名所図会	1858	巻一～五	1
江戸名所図会	1834	巻一～七	7
駿河名所図会	1857	巻一～二	1
尾張名所図会	(1830)	巻一～二	6
摂津名所図会	1796	巻一～九	1
和泉名所図会	1796	巻一～四	2
伊勢参宮名所図会	1717	巻一～五	2
紀伊国名所図会	1811 ～1942	巻一～五 之上、下 巻二～三 巻三～四 巻四～五 巻五～六 巻六～七 巻七～八 巻八～九 巻九～十 巻十～十一 巻十一～十二 巻十二～十三 巻十三～十四 巻十四～十五 巻十五～十六 巻十六～十七 巻十七～十八 巻十八～十九 巻十九～二十 巻二十～二十一 巻二十一～二十二 巻二十二～二十三 巻二十三～二十四 巻二十四～二十五 巻二十五～二十六 巻二十六～二十七 巻二十七～二十八 巻二十八～二十九 巻二十九～三十 巻三十～三十一 巻三十一～三十二 巻三十二～三十三 巻三十三～三十四 巻三十四～三十五 巻三十五～三十六 巻三十六～三十七 巻三十七～三十八 巻三十八～三十九 巻三十九～四十 巻四十～四十一 巻四十一～四十二 巻四十二～四十三 巻四十三～四十四 巻四十四～四十五 巻四十五～四十六 巻四十六～四十七 巻四十七～四十八 巻四十八～四十九 巻四十九～五十 巻五十～五十一 巻五十一～五十二 巻五十二～五十三 巻五十三～五十四 巻五十四～五十五 巻五十五～五十六 巻五十六～五十七 巻五十七～五十八 巻五十八～五十九 巻五十九～六十 巻六十～六十一 巻六十一～六十二 巻六十二～六十三 巻六十三～六十四 巻六十四～六十五 巻六十五～六十六 巻六十六～六十七 巻六十七～六十八 巻六十八～六十九 巻六十九～七十 巻七十～七十一 巻七十一～七十二 巻七十二～七十三 巻七十三～七十四 巻七十四～七十五 巻七十五～七十六 巻七十六～七十七 巻七十七～七十八 巻七十八～七十九 巻七十九～八十 巻八十～八十一 巻八十一～八十二 巻八十二～八十三 巻八十三～八十四 巻八十四～八十五 巻八十五～八十六 巻八十六～八十七 巻八十七～八十八 巻八十八～八十九 巻八十九～九十 巻九十～九十一 巻九十一～九十二 巻九十二～九十三 巻九十三～九十四 巻九十四～九十五 巻九十五～九十六 巻九十六～九十七 巻九十七～九十八 巻九十八～九十九 巻九十九～百	17
摂津名所巡覧図会	1804	巻一～五	3
尾張図会	1842	巻一～十	2
坂崎国名所図会	1894	巻一～五	4
金比羅参詣名所図会	1844	巻一～六	10
薩摩国名所図会	1857	巻一～五 之上、下 巻六～七 巻七～八 巻八～九 巻九～十 巻十～十一 巻十一～十二 巻十二～十三 巻十三～十四 巻十四～十五 巻十五～十六 巻十六～十七 巻十七～十八 巻十八～十九 巻十九～二十 巻二十～二十一 巻二十一～二十二 巻二十二～二十三 巻二十三～二十四 巻二十四～二十五 巻二十五～二十六 巻二十六～二十七 巻二十七～二十八 巻二十八～二十九 巻二十九～三十 巻三十～三十一 巻三十一～三十二 巻三十二～三十三 巻三十三～三十四 巻三十四～三十五 巻三十五～三十六 巻三十六～三十七 巻三十七～三十八 巻三十八～三十九 巻三十九～四十 巻四十～四十一 巻四十一～四十二 巻四十二～四十三 巻四十三～四十四 巻四十四～四十五 巻四十五～四十六 巻四十六～四十七 巻四十七～四十八 巻四十八～四十九 巻四十九～五十 巻五十～五十一 巻五十一～五十二 巻五十二～五十三 巻五十三～五十四 巻五十四～五十五 巻五十五～五十六 巻五十六～五十七 巻五十七～五十八 巻五十八～五十九 巻五十九～六十 巻六十～六十一 巻六十一～六十二 巻六十二～六十三 巻六十三～六十四 巻六十四～六十五 巻六十五～六十六 巻六十六～六十七 巻六十七～六十八 巻六十八～六十九 巻六十九～七十 巻七十～七十一 巻七十一～七十二 巻七十二～七十三 巻七十三～七十四 巻七十四～七十五 巻七十五～七十六 巻七十六～七十七 巻七十七～七十八 巻七十八～七十九 巻七十九～八十 巻八十～八十一 巻八十一～八十二 巻八十二～八十三 巻八十三～八十四 巻八十四～八十五 巻八十五～八十六 巻八十六～八十七 巻八十七～八十八 巻八十八～八十九 巻八十九～九十 巻九十～九十一 巻九十一～九十二 巻九十二～九十三 巻九十三～九十四 巻九十四～九十五 巻九十五～九十六 巻九十六～九十七 巻九十七～九十八 巻九十八～九十九 巻九十九～百	8
阿波名所図会	1812	巻一～五 之上、下 巻六～七 巻七～八 巻八～九 巻九～十 巻十～十一 巻十一～十二 巻十二～十三 巻十三～十四 巻十四～十五 巻十五～十六 巻十六～十七 巻十七～十八 巻十八～十九 巻十九～二十 巻二十～二十一 巻二十一～二十二 巻二十二～二十三 巻二十三～二十四 巻二十四～二十五 巻二十五～二十六 巻二十六～二十七 巻二十七～二十八 巻二十八～二十九 巻二十九～三十 巻三十～三十一 巻三十一～三十二 巻三十二～三十三 巻三十三～三十四 巻三十四～三十五 巻三十五～三十六 巻三十六～三十七 巻三十七～三十八 巻三十八～三十九 巻三十九～四十 巻四十～四十一 巻四十一～四十二 巻四十二～四十三 巻四十三～四十四 巻四十四～四十五 巻四十五～四十六 巻四十六～四十七 巻四十七～四十八 巻四十八～四十九 巻四十九～五十 巻五十～五十一 巻五十一～五十二 巻五十二～五十三 巻五十三～五十四 巻五十四～五十五 巻五十五～五十六 巻五十六～五十七 巻五十七～五十八 巻五十八～五十九 巻五十九～六十 巻六十～六十一 巻六十一～六十二 巻六十二～六十三 巻六十三～六十四 巻六十四～六十五 巻六十五～六十六 巻六十六～六十七 巻六十七～六十八 巻六十八～六十九 巻六十九～七十 巻七十～七十一 巻七十一～七十二 巻七十二～七十三 巻七十三～七十四 巻七十四～七十五 巻七十五～七十六 巻七十六～七十七 巻七十七～七十八 巻七十八～七十九 巻七十九～八十 巻八十～八十一 巻八十一～八十二 巻八十二～八十三 巻八十三～八十四 巻八十四～八十五 巻八十五～八十六 巻八十六～八十七 巻八十七～八十八 巻八十八～八十九 巻八十九～九十 巻九十～九十一 巻九十一～九十二 巻九十二～九十三 巻九十三～九十四 巻九十四～九十五 巻九十五～九十六 巻九十六～九十七 巻九十七～九十八 巻九十八～九十九 巻九十九～百	1
長崎名勝図会	1817	巻一～五 之上、下 巻六～七 巻七～八 巻八～九 巻九～十 巻十～十一 巻十一～十二 巻十二～十三 巻十三～十四 巻十四～十五 巻十五～十六 巻十六～十七 巻十七～十八 巻十八～十九 巻十九～二十 巻二十～二十一 巻二十一～二十二 巻二十二～二十三 巻二十三～二十四 巻二十四～二十五 巻二十五～二十六 巻二十六～二十七 巻二十七～二十八 巻二十八～二十九 巻二十九～三十 巻三十～三十一 巻三十一～三十二 巻三十二～三十三 巻三十三～三十四 巻三十四～三十五 巻三十五～三十六 巻三十六～三十七 巻三十七～三十八 巻三十八～三十九 巻三十九～四十 巻四十～四十一 巻四十一～四十二 巻四十二～四十三 巻四十三～四十四 巻四十四～四十五 巻四十五～四十六 巻四十六～四十七 巻四十七～四十八 巻四十八～四十九 巻四十九～五十 巻五十～五十一 巻五十一～五十二 巻五十二～五十三 巻五十三～五十四 巻五十四～五十五 巻五十五～五十六 巻五十六～五十七 巻五十七～五十八 巻五十八～五十九 巻五十九～六十 巻六十～六十一 巻六十一～六十二 巻六十二～六十三 巻六十三～六十四 巻六十四～六十五 巻六十五～六十六 巻六十六～六十七 巻六十七～六十八 巻六十八～六十九 巻六十九～七十 巻七十～七十一 巻七十一～七十二 巻七十二～七十三 巻七十三～七十四 巻七十四～七十五 巻七十五～七十六 巻七十六～七十七 巻七十七～七十八 巻七十八～七十九 巻七十九～八十 巻八十～八十一 巻八十一～八十二 巻八十二～八十三 巻八十三～八十四 巻八十四～八十五 巻八十五～八十六 巻八十六～八十七 巻八十七～八十八 巻八十八～八十九 巻八十九～九十 巻九十～九十一 巻九十一～九十二 巻九十二～九十三 巻九十三～九十四 巻九十四～九十五 巻九十五～九十六 巻九十六～九十七 巻九十七～九十八 巻九十八～九十九 巻九十九～百	2
三國名勝図会	1905	巻一～六十	11
山水奇観	1717 (1800)	五 巻一 巻二 巻三 巻四 巻五 巻六 巻七 巻八 巻九 巻十 巻十一 巻十二 巻十三 巻十四 巻十五 巻十六 巻十七 巻十八 巻十九 巻二十 巻二十一 巻二十二 巻二十三 巻二十四 巻二十五 巻二十六 巻二十七 巻二十八 巻二十九 巻三十 巻三十一 巻三十二 巻三十三 巻三十四 巻三十五 巻三十六 巻三十七 巻三十八 巻三十九 巻四十 巻四十一 巻四十二 巻四十三 巻四十四 巻四十五 巻四十六 巻四十七 巻四十八 巻四十九 巻五十 巻五十一 巻五十二 巻五十三 巻五十四 巻五十五 巻五十六 巻五十七 巻五十八 巻五十九 巻六十 巻六十一 巻六十二 巻六十三 巻六十四 巻六十五 巻六十六 巻六十七 巻六十八 巻六十九 巻七十 巻七十一 巻七十二 巻七十三 巻七十四 巻七十五 巻七十六 巻七十七 巻七十八 巻七十九 巻八十 巻八十一 巻八十二 巻八十三 巻八十四 巻八十五 巻八十六 巻八十七 巻八十八 巻八十九 巻九十 巻九十一 巻九十二 巻九十三 巻九十四 巻九十五 巻九十六 巻九十七 巻九十八 巻九十九 巻百	28
日本名山図会	1812	天 巻一 巻二 巻三 巻四 巻五 巻六 巻七 巻八 巻九 巻十 巻十一 巻十二 巻十三 巻十四 巻十五 巻十六 巻十七 巻十八 巻十九 巻二十 巻二十一 巻二十二 巻二十三 巻二十四 巻二十五 巻二十六 巻二十七 巻二十八 巻二十九 巻三十 巻三十一 巻三十二 巻三十三 巻三十四 巻三十五 巻三十六 巻三十七 巻三十八 巻三十九 巻四十 巻四十一 巻四十二 巻四十三 巻四十四 巻四十五 巻四十六 巻四十七 巻四十八 巻四十九 巻五十 巻五十一 巻五十二 巻五十三 巻五十四 巻五十五 巻五十六 巻五十七 巻五十八 巻五十九 巻六十 巻六十一 巻六十二 巻六十三 巻六十四 巻六十五 巻六十六 巻六十七 巻六十八 巻六十九 巻七十 巻七十一 巻七十二 巻七十三 巻七十四 巻七十五 巻七十六 巻七十七 巻七十八 巻七十九 巻八十 巻八十一 巻八十二 巻八十三 巻八十四 巻八十五 巻八十六 巻八十七 巻八十八 巻八十九 巻九十 巻九十一 巻九十二 巻九十三 巻九十四 巻九十五 巻九十六 巻九十七 巻九十八 巻九十九 巻百	3
東海道名所図会	1797	巻一～六	3
中国名所図会	1806 ～1813	巻一～四	3
西国三十三所名所図会	1853	巻一～八	2
二十四尊順拝図会	1718 (1809)	巻一～五 後編 巻一～五	5
合計	25		127

* 表中の()内の数字は、名所図会の一部の刊行年

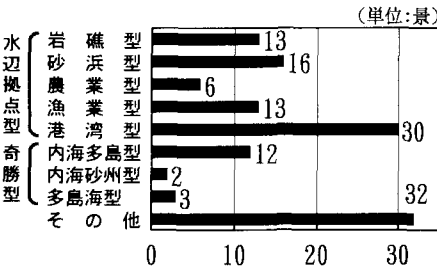


図2 湾の種類ごとの事例数

- ①湾の種類にはさまざまな地形や土地利用をもつものがある。大きくは、湾内に島や砂州があるなど珍しい地形を備えた「奇勝型」の湾と、全国的にどこにでもあるような岩礁、砂浜、港湾、漁業など水辺に特徴的な地形や土地利用を備えた「水辺拠点型」の湾の2種類である。当時の人々は奇勝的な地形をもった湾だけではなく、日常的なくらしの場も含む一般的に存在するような湾にも名所としての価値を見いだしていたことがわかる。
- ②細かくみるとさらに8種類に分類することができ、その中で事例数が最も多いものは港湾型の湾

で、次いで砂浜、岩礁、漁業、内海多島型である。他に較べて人口が集中している港湾型が若干多いものの、奇勝性の高い湾から一般的に存在する湾まで、また砂浜等の自然的なものから、港湾などの人工的な生活の場といえる湾まで存在し、全体的にみて、名所として捉えられた湾は多様な種類のものを含んでいる。

5. 名所図会に描かれた湾の景観のテーマの分析

ここでは湾のどのような側面が当時注目されていたか、つまり図会に描かれている景観のテーマ（主対象）を明らかにする。基本的に各図会に付してある表題が景観のテーマを示しているが、ひとつひとつ図会を見て、明らかに主対象が表題とは異なる場合には、新たに景観のテーマを決定した。また、本研究では文学や歴史などの意味的なものを越えたところに普遍的な湾の景観があると考え、景観のテーマが意味的な場合は、意味的な部分を取り除いた上で、図会から判断して新たにテーマを決定した。表2に景観のテーマとその事例数を示す。

表2 景観のテーマとその事例数

景観のテーマの分類		景 数	
全 景		7 8	
特定景	活動景	漁活動（水辺） 水辺遊び（水辺） 磯遊び（水辺） 街道を歩行する人びと（水辺） 街道の松ノ木の下の人々（山腹）	1 1 4 1 1 8
	構造物景	寺社（水辺） "（山腹、山上） 商店（山腹） "（水辺） 眺望台（山腹） 茶店（山腹） 閑居（山腹）	8<4> 3<2> 1<1> 2<2> 1<1> 1<1> 1<1> 1 8 <12>
	帆船景（湾水面上）		4
	自然景	山（湾外） 多島海（湾外） 太陽（湾外）	1 3 3 3 1 9

注1）表中の<>内の数字は、主対象の中に人びとと活動も含まれている景の数

注2）表中の（）内に主対象の存在する位置を示している

表2より明らかなことを以下にまとめる。

①景観のテーマは大きく2つに分けられ、主対象が湾の全体の姿である「全景」と、主対象が湾の中かあるいは外に存在する特定の事物であるもので、湾と他の景物との組み合わせの景である「特定景」である。事例数的には「全景」が多く、湾

全体の姿形が名所として捉えられていたと考えられる。

②「特定景」では、活動景や構造物景といった、いわば湾自体がその舞台役となって主対象を引き立てる景観としての湾の存在が確認できる。

③「特定景」では、なりわいや遊びあるいは旅人といった「人々の活動」から、寺社や商店、茶店といった「人々を含む構造物」、あるいは山、太陽といった「自然」などがあり、その当時の湾と人々との関係の中での多様な場面が景観のテーマとして切りとられていることが確認できる。

④特定景での主対象が存在する位置について、活動景では「水辺」、構造物景では「水辺」および「山腹」、帆船景は「海上」、山景は「湾外」というように主対象自体が様々な位置に存在しているとともに、主対象の性格によってその存在する位置がおおよそ決まっていることが確認できる。

⑤活動景の8景と構造物景において人々の活動も描かれている場合の12景を加えると全体で20景になり、特定景において「人々の活動」が重要な要素になっていることが指摘できる。

次に、当時注目されていた湾の種類と、その景観のテーマとの関係を分析する。その結果を表3に示す。

表3 湾の種類と景観のテーマとの関係

景観のテーマの分類 \ 湾の種類		水辺拠点型				奇勝型			その他	合 計
		岩礁型	砂浜型	漁業型	港湾型	内海多島型	内海砂州型	多島海型		
全 景		6	13	6	10	22	12	2		78
活動景	漁活動（水辺）			1						
	水辺遊び（水辺）		1							
	磯遊び（水辺）	4								
	街道を歩行する人びと（水辺）	1								
	街道の松ノ木の下の人々（山腹）								1	
特定景	寺社（水辺）	2	2	2	2				3	
	“（山腹、山上）								1	
	商店（山腹）								1	
	“（水辺）				2				1	
	眺望台（山腹）								1	
帆船景	茶店（山腹）								1	
	閑居（山腹）								1	
	帆船景（湾水面上）				4					4
自然景	山（湾外）								13	
	多島海（湾外）							3		19
	太陽（湾外）								3	
合 計		13	16	6	13	30	12	2	3	32

注）表中の（）内に主対象の存在する位置を示している

表3より明らかなことを以下に列挙する。

①水辺拠点型の湾ではどの種類の湾に注目しても湾の全景が最も多く、「代表的な景」といえる。

②水辺拠点型の各々の種類の湾では、湾の全景以

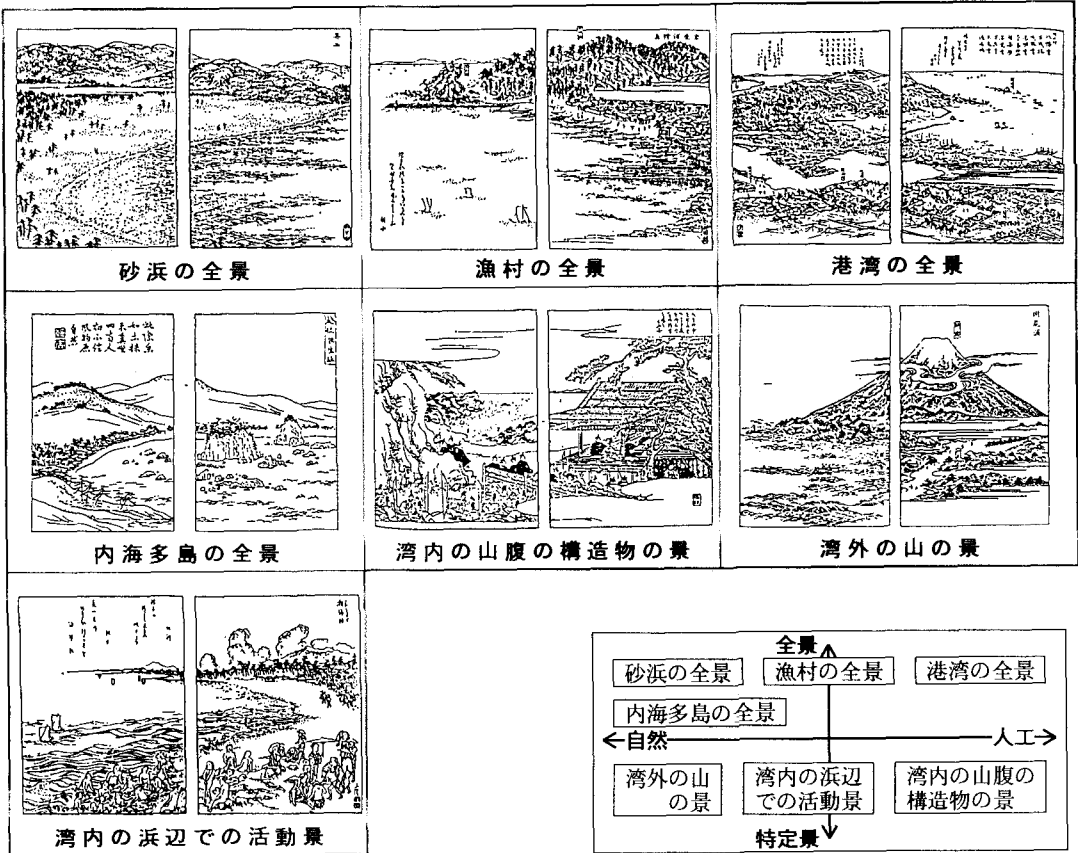


図3 近世の湾の代表的な景観のテーマ

外の事例数は多くないが、活動景や構造物景などがいくつか存在し、各種類の湾ごとにも多面的な湾と人々の関係から景観のテーマが切りとられている。

③その他の湾では、主対象が山腹や湾外に存在する特定景となっており、特に湾の種類に関係なく成立する景観のテーマと考えられる。

④以上より当時注目された湾における代表的な景観のテーマとしては、全景では湾の自然性を象徴する「砂浜の全景」、湾でのなりわいを表す「漁村の全景」、湾の都市的側面を表す「港湾の全景」、奇勝的な湾を代表する「内海多島の全景」、また特定景では「湾内の山腹の構造物（寺社、商店等）の景」「湾外の山の景」「湾内の浜辺での活動景」をあげることができる。以上の7つの景の事例を図3に示す。また、これらの景観のテーマは全景－特定景／自然－人工という2つの軸で構成され

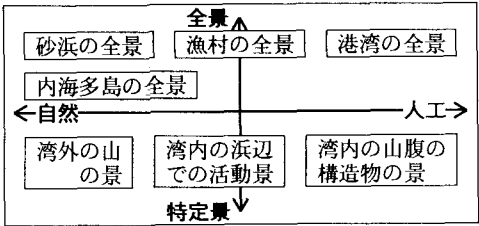


図4 景観のテーマの位置づけ

る空間上でバランスをもって存在していることがわかる（図4）。

6. 名所図会に描かれた景観ディスプレイの分析

ここでは景観を成立させている要素の内、視対象ではなく主体側の条件である景観ディスプレイ、つまりどのように景観対象を見せているかということ进行分析する。

本来、景観ディスプレイ論とは、人間の視野を画面に見立て、その画面の中で景観対象をどこに位置づけ眺めるのがよいかを論ずるものであり、主体の視点と視対象との距離、視線の方向、視対象への視線入射角（俯角、仰角）などが問題となるが、本研究では名所図会という分析対象の制約上、視点の位置と視線の方向について分析する。

(1) 分析方法

視点の位置を完全には特定することはできないの

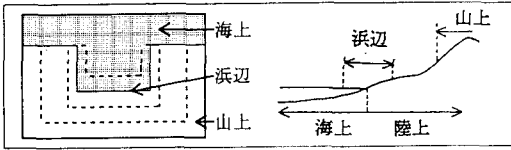


図5 視点の位置のモデル

で、図5に示す簡単な視点の位置のモデルを考える。

基本的には陸上と海上で分け、陸上および海上の境界に「浜辺」、陸上のみで「山上」という領域を設ける。「浜辺」とは水際線近傍のことで、ここではその目安として、スプレイゲンの距離ランク⁵⁾を用い、水際線における人の動作が判別できる距離(135m)の範囲内を領域とする。「山上」とは図会の景を眺め、その前景部分に至近距離で山肌が見える、あるいはその山肌で眺望している人がいる場合には山上を視点と考える。「浜辺」あるいは「山上」と特定できない場合は「その他」とする。

また視線の方向については図6に示すLS、SL、LSLの3つのタイプを定義する。

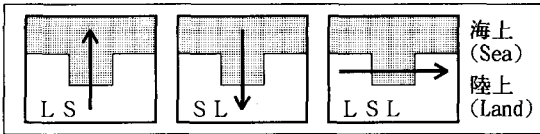


図6 視線の方向のモデル

(2) 景観ディスプレイの全体的傾向

まず、景観ディスプレイの全体的傾向について述べる(表4)。

視点の位置については特定しにくく、その他も多くなって

いるが、表4より以下のことが明らかとなった。

①視点の位置について、架空の視点と考えられる海上も全体の1/4を占めているが、基本的には人間が地に足を付けて実際に景観を眺めることができる陸上の方が多くなっている。

②視点のより具体的な位置についてはその他が多いが、山上(17/122)と浜辺(24/122)もいくつか存在し、湾を眺める視点場として捉えられている。

表4 景観ディスプレイの全体的傾向

視点の位置	視線の方向			合 計
	LS	SL	LSL	
陸上	5	13	18	86
海上	4	17	21	
その他	18	3	26	
海上	1	2	3	31
陸上	2	5	3	
その他	1	2	3	
合 計	27	30	65	122

③視線の方向は、LSL型が全体の過半数を占めていることから、「湾」を横断して対岸方向を見たいいわゆる「湾」の横顔が好んで眺められていることがわかる。

④視点の位置と視線の方向との組合せでみると、図7に示すようにおおむね5種類の類型が抽出できる。

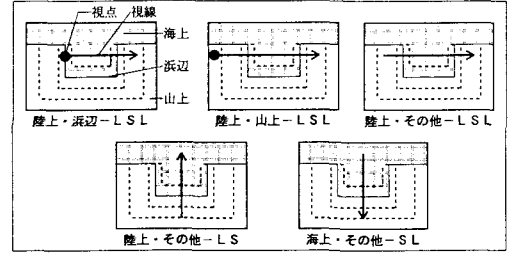


図7 景観ディスプレイの類型

(3) 景観ディスプレイと景観のテーマとの関係

つづいて景観のテーマおよび景観中の主対象の存在する位置と景観ディスプレイとの間の関連を分析した。表5に景観ディスプレイと景観のテーマとの関係を示す。

表5 景観ディスプレイと景観のテーマとの関係

景観ディスプレイ		視点の位置→						合 計
		陸上	陸上・浜辺	陸上・山上	陸上・その他	海上	その他	
景観のテーマの分類		視線の方向→						合 計
		LS	SL	LSL	SL	LSL	SL	
全 景	岩礁型	4	3			4		4
	砂浜型	2						11
	農業型		2	1				5
	漁業型					4	2	10
	港湾型	3		1	3	9	6	22
活動景	内海多島型	5		2	2	1	2	12
	内海砂州型			2				2
	漁活動(水辺)		1					1
	水辺遊び(水辺)	1	1					1
	磯遊び(水辺)		2				1	4
特定景	街道を歩行する人びと(水辺)		1					1
	街道の松ノ木の下の人々(山腹)							
	寺社(水辺)		1		5		2	8
	商店(山腹、山上)			2	1			3
	眺望台(山腹)	1	1					2
自然景	茶店(山腹)			1				1
	閑居(山腹)			1				1
	帆船景(湾水面上)					4		4
	山(湾外)		1	4	7	1		13
	多島海(湾外)	3						3
合 計	太陽(湾外)	3						3
		27	13	17	26	26	13	

注) 表中の()内に主対象の存在する位置を示している

表 6 主対象を際立たせる景観ディスプレイの型

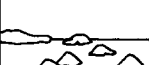
	特 徴	景観のテーマ（存在位置）	景観ディスプレイ	模式図
湾水面 背景型	主対象を前面に置き、湾水面をその背景とし、湾の地形をうまく使って主対象をきわだたせている	活動景、構造物景（水辺） 構造物景（手前の山腹）	陸上－L S L	
湾水面 舞台型	主対象を湾曲線で縁取られた額縁の中の湾水面という舞台で目立たせている	帆船景（湾水面上）	海上－S L	
湾水面 ひき空間型	湾水面というからっぽのひき空間が主対象までの視線を用意して、主対象をより引き立たせてみせている 山景では山が長くのびる湾曲線のアイストップの役割も果たし、多島海景や太陽景では視線が海方向にまっすぐのびており、多島や太陽がいつでも見えやすくなっている	山景（向こうの湾外）	陸上－L S L	
		多島海景、太陽景（向こうの湾外）	陸上－L S	

表5より以下のことが明らかとなった。

①湾の全景については、景観ディスプレイをその「湾の種類」によって説明できる。

- 岩礁型は海上－S Lで、これは岩礁という地形の特性上、陸側に人が立ち入ることが難しく、自ずと海上に視点を置く景観ディスプレイになると考えられる。
- 漁業型、港湾型ではいずれの場合も湾での活動領域が陸上だけでなく海上にも及んでいるため、陸上と海上の両方の視点が存在する。
- それ以外の型については視線の方向は様々であるが、これらの湾での人々の活動領域がおもに陸上に限られるため、多くは陸上に視点を置いている。

②特定景での景観ディスプレイは、主対象のスケールやその存在する位置、あるいは湾の地形特性がよく考えられて設定されている。

- 主対象が水辺に存在する場合の活動景では、視点を浜辺に置いているが、これは活動景という主対象が小さなスケールであるため、その可視性を考慮して、視点を主対象の位置の近傍にしていると考えられる。
- 湾の地形特性をうまく活用して主対象を際立たせて見せる景観ディスプレイの型が3類型存在した。その特徴を表6にまとめておく。

7. 結論

本研究より明らかとなった、当時好まれていた湾の景観の特徴は以下に示すとおりである。

①名所として考えられていた湾の種類は奇勝的な

ものから一般的なものまで多様であった。

②湾の景観のテーマについては、湾の種類に関係なく湾の「全景」が多くなっており、一方で、湾の種類ごとに「特定景」も存在し、当時の多様な生活場面を描いたテーマが見られた。

③当時の湾の代表的な景観のテーマを7つ抽出した。

④景観ディスプレイについて、視点の位置と視線の方向の組み合わせから5つの類型を抽出したが、全体的な傾向としては、湾を横断して対岸方向を望む景観が好まれていた。また、主対象を際立たせる景観ディスプレイの型として3類型を抽出した。

参考文献

1) 樋口忠彦：日本の景観，春秋社，1981，pp106-131
2) 斎藤 潮：領域の相互的視体験に基づく港まちの景観計画に関する基礎的研究，第21回日本都市計画学会学術研究論文集，1986，pp439-444
川崎雅史：港湾空間のイメージ分析，土木計画学研究・論文集No.5，1987，pp99-106
他多数、景観設計マニュアルとしては
土木学会編：港の景観設計，技報堂出版，1991
3) 渡辺勝彦：江戸と名古屋の名所とその景観（季刊 自然と文化），1990，p12
4) 日本名所風俗図会・全18巻，角川書店，1980-1983
5) P.D. スプライゲン：アーバンデザイン，日本サムシング，1966，p73